

# 大会要項

1 研究主題

未来に生きてはたらく力を育てる社会科学習  
「習得から活用～様々な表現活動を通して～」

2 期 日 平成22年11月19日（金）

3 会 場 阿波市立 <sup>とろり</sup>土成中学校

〒771-1507 徳島県阿波市土成町吉田字一本松の二-42番地  
TEL 088-695-2008 FAX 088-695-2190

4 主 催 四国社会科教育協議会 徳島県中学校社会科教育研究会

5 共 催 徳島県中学校教育研究会社会部会

6 後 援 香川県教育委員会 高知県教育委員会  
愛媛県教育委員会 徳島県教育委員会  
阿波市教育委員会 吉野川市教育委員会  
徳島県市町村教育委員会連合会  
徳島県中学校長会 徳島県教育会

7 日 程

8:30 9:00 9:20 9:30 10:20 10:40 12:40 13:40 14:00 14:40 14:50 16:10 16:30

受 付	基 調 提 案	移 動	公 開 授 業	移 動	分 科 会					昼 食	全 体 会				
					分 野 取 組	授 業 説 明	分 野 提 案	質 疑 応 答	指 導 助 言		開 会 行 事	講 評	休 憩	記 念 講 演	閉 会 行 事

8 基調提案 徳島県中学校教育研究会社会部会 研究委員長 立岩 一彰

9 講 評 鳴門教育大学 教授 梅津 正美 先生

10 記念講演 演 題 「アラスカ・フォトライブ」  
講 師 写真家 松本紀生 先生

1972年、松山市生まれ。松山北高を卒業後、立命館大学へ入学。在学中に故星野道夫氏に憧れ、写真家を志す。中退し、アラスカ大学へ編入。独学でカメラやキャンプの技術を習得。卒業後は、1年の約半分をアラスカの原野で一人で過ごし、自然の撮影に専念する。

アラスカ・フォトライブとは、大スクリーンにオーディオを駆使した映画館さながらの空間で繰り広げられる、松本紀生による新しい形のエンターテイメント・スライドショー。ザトウクジラ、原生林、オーロラなど、大自然の写真を心安まるBGMとともに、また独りでの無人島キャンプや氷河上のかまくら生活といった撮影の様子を、解説とともにご覧いただきます。合間には撮影風景や野生動物の貴重な生態を捉えたビデオ映像を紹介し、また、地球温暖化による被害の現状など、アラスカの今を余すことなく臨場感たっぷりにお伝えします。

11 全体会

(1) 開会行事

- |           |                                   |               |
|-----------|-----------------------------------|---------------|
| ① 開会のことば  | 第38回四国社会科教育研究大会徳島大会<br>中学校の部実行委員  | 清海 誠一         |
| ② あいさつ    | 第38回四国社会科教育研究大会徳島大会<br>中学校の部実行委員長 | 小野 和敏         |
| ③ 祝 辞     | 徳島県教育委員会教育長<br>阿波市教育委員会教育長        | 福家 清司<br>板野 正 |
| ④ 講師・来賓紹介 |                                   |               |
| ⑤ 閉会のことば  | 第38回四国社会科教育研究大会徳島大会<br>中学校の部実行委員  | 尾崎 敏文         |

(2) 記念講演

- |        |                                    |       |
|--------|------------------------------------|-------|
| ① 講師紹介 | 第38回四国社会科教育研究大会徳島大会<br>中学校の部実行副委員長 | 植原 文明 |
| ② 講 演  | 写 真 家                              | 松本 紀生 |
| ③ 謝 辞  | 第38回四国社会科教育研究大会徳島大会<br>中学校の部実行副委員長 | 生杉 孝晴 |

(3) 閉会行事

- |               |                                  |       |
|---------------|----------------------------------|-------|
| ① 開会のことば      | 第38回四国社会科教育研究大会徳島大会<br>中学校の部実行委員 | 吉岡日出利 |
| ② 会場校校長あいさつ   | 阿波市立土成中学校長                       | 稲井 政人 |
| ③ 次期開催県代表あいさつ | 高知県社会科教育研究会中学校部会長                | 大谷 明彦 |
| ④ 閉会のことば      | 第38回四国社会科教育研究大会徳島大会<br>中学校の部実行委員 | 桑田 郁男 |

# 社会科（地理的分野）学習指導案

第1学年1組 35名

指導者 阿波市立土成中学校 教諭

井内哲也

## 1 単元名 身近な地域

## 2 単元設定の理由

### (1) 学習者の実態

本学級は、入学した当初から、社会科について興味関心を持っている生徒が多かった。しかし、歴史上の人物や大きな事件に関心があり、地理は歴史に比べて関心が低かった。そこで、地理学習の最初の単元である「世界のすがたとさまざまな地域」では、興味関心のあるテーマで世界の国々を調べる活動に取り組んだ。「世界遺産の多い国」「サッカーの強い国」「戦争をしている国」「絶滅危惧生物の多い国」など生徒たちが自分で決めたテーマで、どのような国があるかをグループごとに調べた。生徒は、自分たちの興味あるテーマについて調べたので、意欲的に取り組んだ。しかし、小学校で世界地理の学習が少ないこともあり、新鮮に学習に取り組める反面、基礎的な知識が十分でないことも感じた。また、調べたことを要領よくまとめて発表することや、他の生徒の発表を聞いて質問することなどは、まだまだ不十分であった。他の授業でも、教師の質問には積極的に答えるが、単発的で、思いつきの発言が多く、他の生徒の意見を聞いて、じっくり考えることが苦手な生徒も多い。そこで、これからの学習活動を通して、基礎的な事実をもとに、自分で考えて意見をまとめ、相手にわかりやすく表現する力を、まず育てていきたい。

本単元の教材となる地元の阿波市土成町について、生徒たちに事前調査（第1学年68名が回答）を行ったところ、「土成町のことで、他の町の人も知っている有名なことは？」との問いには、無回答や「何もない」という回答が27名と多かったが、三木武夫（17名、土成町出身）、たらいうどん（9名）に続き、ブドウ（6名）、イチゴ（6名）などの農産物の回答が続いていた。また、「土成町で作っている農作物にはどんな物がありますか？」には、イチゴ（50名）、ブドウ（42名）、タバコ（11名）、スタチ（9名）、メロン（5名）、米（4名）などと答えている。ブドウやイチゴは国道沿いに販売所があり、生徒たちも日常的に目にしているし、小学校での地域学習も行っており、地元の特産品として意識している生徒が多い。また、29名が「自分の家が農業をしている」と答えている。このように農業が身近にある地域なので、これを題材として「身近な地域」の学習を進めていきたい。そして、小学校での学習の知識などをもとにしながら、中学校社会科の地理学習として、より深めた学習を行っていきたい。

そこで、本単元では、作物の栽培が様々な自然条件や社会条件のもとで行われていることを、多角的・多面的に考察し、理解させたい。また、地元に対する興味・関心を深めて調査活動に取り組ませ、資料を活用する能力や、調べた内容を相手にわかりやすく伝える表現力を育てていきたい。

### (2) 単元について

本単元は、現行学習指導要領の内容（2）「地域の規模に応じた調査」のア「身近な地域」に該当し、日本の都道府県や世界の国々の調査の前に行い、調べ学習の入門的な位置づけとなっている。そのねらいは、「身近な地域における諸事象を取り上げ、観察や調査などの活動を行い、生徒が生活している土地に対する理解と関心を深めさせるとともに、市町村規模の地域的特色をとらえさせる視点や方法、地理的なまとめ方や発表の方法の基礎を身に付けさせる」となっている。

具体的な実践例を示す。

- 「アメリカ合衆国を調べよう」  
徳島県中学校社会科教育研究大会に向けて（板野町立板野中学校）
- 「条約による国境の変遷」  
徳島県中学校社会科教育研究大会に向けて（阿波市立吉野中学校）
- 「沖縄県について調べよう」  
四国社会科教育研究大会に向けて（吉野川市立鴨島第一中学校）
- 「世界の国々を知ろう」  
四国社会科教育研究大会にむけて（阿波市立土成中学校）
- 「地球儀と世界地図の違いを調べよう」  
四国社会科教育研究大会に向けて（松茂町立松茂中学校）

以上のような授業実践及び授業研究を繰り返し、本年度に至っている。現状を次のようにまとめたい。

それぞれの授業実践において、生徒に習得・活用させたい知識は何であるのか（知識の明確化）と、その知識が知識の構造図のどれにあたるのか（知識の関連）を明らかにしてきた。生徒に習得・活用させたい知識を明確にすることは、教師自身が、その授業における問いや学習目標や学習活動を設定することにつながる。つまり、一つ一つの授業が断片的な知識の暗記に陥るのではなく、「生徒が習得・活用する知識は何であるのか」を明確にすることによって、獲得すべき知識の順番や学習内容の順序・範囲を設定することができる。このような実践を積み重ねてきた結果、知識の定着度や応用度が高まってきていると感じる。また表現活動においても、発表、意見交換、説明など、様々な活動形態を取り入れることによって、知識の獲得を目指しているところである。活動の中においても、知識の構造図と関連を意識し、表現活動を通して獲得した知識を問いながら、実践を重ねてきた。

#### 今後の課題

- 「概念の再構築」がこれからの課題である。概念的知識とは、ある地域における共通性・法則性である。また、習得した説明的知識の視点で、該当する社会的事象を捉えていく中で、その説明的知識が、他の多くの社会的事象にもあてはまることを確認していくことが概念的知識への高まりにつながる。「概念的知識の再構築」とは、習得した概念（共通性・法則性）を問い直し、新たな概念を設計することである。これは、ある地域の社会的事象が、習得した概念的知識にあてはまらない事例となった場合、その理由を学習課題として、仮説を立て検証し、思考を深めていくことを通して、新しい概念を構築していく学習である。習得した概念的知識を固定的に捉えるのではなく、「概念の再構築」を学習過程に取り入れ、生徒の思考力を育てていきたい。
- 学習成果を生かして価値判断をしていくことで、価値的知識の習得を目指すことが2点目の課題である。特に、身近な地域を教材として取り上げる場合、「自分たちの住んでいる地域をどのようにしていきたいのか。」「自分たちの住んでいる地域の課題を、どのようにすべきなのか。」など、自分たちの住んでいる地域の未来を考え予測し、適切な判断をすることで、地域への愛着を持たせたり、地域に関わっていく社会参画の態度を育てたりすることにつながる。価値的知識の習得のために価値判断をさせることは、これまで習得してきた知識を活用したり、未来を予測したりすることを土台として学習されることから、知識を総合的に活用する学習といえる。生徒が社会参画をしていく態度を育成するために、生徒にとって切実性のある地域の課題を取り上げ、価値判断を取り入れた実践を重ねていきたい。

また、内容の取り扱いでは「学校所在地の事情を踏まえて観察や調査を指導計画に位置付け実施すること。その際、縮尺の大きな地図や統計その他の資料に親しませ、それらの活用技能を高めるようにすること」となっている。

新学習指導要領では、内容の(2)「日本の様々な地域」のエ「身近な地域の調査」となり、世界や日本の学習を終えた後、地理的分野の最後の単元となり、これまでとは位置づけが大きく変わっている。内容は現行の指導要領をそのまま引き継いだ上に新たに「地域の課題を見だし、地域社会の形成に参画しその発展に努力しようとする態度を養う」ことが加えられている。そして、内容の取り扱いでも、新たに「また、観察や調査の結果をまとめる際には、地図を有効に活用して事象を説明したり、自分の解釈を加えて論述したり、意見交換したりするなどの学習活動を充実させること」が付け加えられている。本学習活動は、現行指導要領によるが、新学習指導要領に示された「説明・論述」などの表現活動も取り入れて行っていきたい。

本単元の教材となる阿波市土成町は、農業が基幹産業となっている地域で、2006年の統計では、阿波市が農業産出額で県下1位の市町村となっている。(徳島県市町村別指標2010)また、合併前の2005年の統計(農林水産省 農林業センサス)では、土成町が、ブドウ、タバコ、メロンの栽培面積で県下1位であった。しかし、土成町は、自然条件としては年間降水量1200mm程度と少なく、地形的にも宮川内谷川や九頭宇谷川などの扇状地が広がっている。このため古くから農業用水の確保に苦勞してきた地域である。

また、社会的条件の影響としては、江戸時代以来栽培されてきた藍やさとうきびが、20世紀に入って輸入品に取って代わられたため、桑の栽培・養蚕が広がった。戦後は、生活の変化などで桑から果樹やタバコの栽培に移り変わり、灌漑用水の完成で水田も増えてきた。現在では、近畿圏向けのトマトやメロン、イチゴなどの栽培も多い。このように、農業は自然条件だけでなく、社会条件の変化にも影響を受けて行われていることを多面的にとらえさせたい。また、その条件のもとで、地域の人々の様々な努力や工夫がなされていることに気づかせたい。

### (3) 指導の重点

本単元の指導にあたって、習得させたい知識・技能として、地形図の読み取りや、統計資料の活用、聞き取り調査の方法やマナーなどに関する基礎的な知識や技能がある。また、この知識・技能をもとにして生徒が調べたり、授業で学んで習得した「記述的知識」、つまり、土成町の自然条件や社会条件、作物の特徴や栽培の移り変わりなどの地域的な特色などをしっかりとらえさせたい。そして、習得したこれらの「記述的知識」を活用して「説明的知識」「概念的知識」を習得するという学習活動に取り組みたい。

「説明的知識」としては、例えば「土成町では戦前、桑畑があったが、戦後、水田や果樹園が増えたのはなぜか。」などの学習課題を、習得した「記述的知識」を活用して考えさせることによって「説明的知識」を習得することができると考えている。また「概念的知識」については、例えば甲府盆地などと比較することによって「扇状地では、果樹栽培が盛んなこと」に気づかせたり、高知平野などと比較して、「大都市向けの施設園芸作物の共通点」に気づかせて、「概念的知識」を習得させたい。このように適切な学習課題に基づいて、作物の栽培を自然条件や社会条件によって説明できる「説明的知識」や、他の地域と比較し、共通点や相違点を見だし、一般的な概念や、共通性・法則性を理解させる「概念的知識」を習得させていきたい。

そして、この学習活動を進めるうえで、調査結果をまとめたり、わかりやすく説明するために、適切な表現活動を効果的に活用できるよう指導していきたい。特に地図を使って地域の様子を表現できるようにしていきたい。

### 3 単元の目標

#### 【観点Ⅰ】 関心・意欲・態度

- ・自分たちの生活している土成町に関心を持ち、自ら意欲的に調べようとすることができる。

#### 【観点Ⅱ】 社会的な思考・判断

- ①調査テーマをもとに、適切な資料や調査方法を選ぶことができる。
- ②調べた結果をもとに、学習課題について考察することができる。

#### 【観点Ⅲ】 資料活用の技能・表現

- ①地元の地形図から、地域的な特徴を読み取ることができる。
- ②統計資料の活用や聞き取り調査の技能を身に付け、調査結果をわかりやすくまとめ、発表することができる。

#### 【観点Ⅳ】 社会的事象についての知識・理解

- ①地形図の読み取りや、統計資料の活用、聞き取り調査の方法やマナーなどに関する基礎的な知識を身に付ける。
- ②土成町の様々な自然条件や社会条件のなかで、どのように農業が行われてきたかを理解する。

### 4 学習計画と評価計画（全9時間）

#### 習得1

#### [1] 地形図の読み取り方…（2時間）Ⅳ①

- ・地図記号、縮尺、方位、等高線などの地形図についての基礎的知識や技能を身に付ける。

#### [2] 身近な地域の地形図から地域の特徴を読み取る…（1時間）Ⅲ①

- ・地形図についての基礎的知識・技能をもとに、身近な地域の新旧の地形図から地域の特徴を読み取る。
- ・特に土地利用の変化に注目し、土成町の農業に関する調査活動を計画する。

#### [3] 土成町の農業について調べる…（4時間）Ⅰ，Ⅱ①，Ⅲ②，Ⅳ②

- ・作物の特徴を、栽培に適した自然条件や社会条件に着目して、文献資料や聞き取り調査で調べる。
- ・土成町の気候や地形などの自然条件や、高速道路開通などの社会条件について調べる。
- ・調べた結果について、地図や表・グラフを使ってわかりやすくまとめる。

↓ 活用1

## 習得2

[4] 調べた結果を発表し、考察する… (2時間) 本時2/2 II②, III②, IV②

- ・作物の特徴や、土成町の自然条件、社会条件など調べたことを発表し、内容を理解する。
- ・学習課題について、調査結果をもとに、自然条件や社会条件をふまえて考察する。
- ・他地域との比較で、共通点や相違点を考察する。

### 5 本時の学習指導

#### (1) 目標

土成町で栽培されてきた農作物の特徴と、土成町の自然条件や栽培当時の社会条件をまとめ、わかりやすく発表するとともに、それをもとに栽培作物についての学習課題を考察する。

#### (2) 展開

学 習 活 動	指導の手だて	評価の観点・方法
1 これまでの学習を振り返り、本時の学習課題について確認する。	○ これまでに学習した農作物の特徴などについて復習させる。	・ワークシート
2 学習課題の作物の特徴と当時の社会条件、土成町の自然条件など調べたことを発表する。	○ 調査結果を地図や表などを使い、わかりやすく表現させる。 ○ 農家が有利な条件を生かし、不利な条件を克服しようと、どのような努力や工夫があったかに気づかせる。	・地図等の掲示物 III② ・
3 発表をもとに、学習課題について考察し、学習のまとめを行う。	○ 調べたことやこれまでの学習をもとに、多面的に考察させる。 ○ 他地域と比較して、共通点や相違点を考えさせる。	・ワークシート II②, IV②

#### (3) 評価

「十分満足できる」と判断される状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・統計資料の活用や聞き取り調査の技能を十分に身に付け、調査結果をわかりやすくまとめ、工夫して発表することができる。</li> <li>・調べた結果を十分理解し、それを活用して学習課題を多面的に考察し、自分の意見をまとめて発表することができる。</li> </ul>
「おおむね満足できる」と判断される状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・統計資料の活用や聞き取り調査の技能を身に付け、調査結果をまとめ、発表することができる。</li> <li>・調べた結果を理解し、それに基づいて学習課題を考察することができる。</li> </ul>

# 社会科（歴史的分野）学習指導案

第2学年1組 39名

指導者 阿波市立市場中学校 教諭

中野敬司

## 1 単元名 二度の世界大戦と日本

### 2 単元設定の理由

#### (1) 学習者の実態

本学級の生徒は、歴史に興味を持ち、楽しみながら授業に取り組んでいる。発問に対しては、これまでの学習をふり返ったり資料を見たりしながらよく考え、積極的に発言する生徒が多い。常に、一方的に教えるだけではなく、過去の事象が「なぜ起こったのか」「なぜこのように変わっていったのか」をグループで考えさせながら、これまで授業を進めてきた。生徒たちの姿を見ると、今まで学習した内容の知識を問うことに関しては正解を見つけるのは速く、自信を持って発言できている。その反面、その時代の特色をとらえ、論理的に説明することに対しては思考が深まらず、極端に発言が少なくなるのが課題である。

#### (2) 単元について

本単元は二度にわたる未曾有の世界大戦を中心に構成されており、内容を大きく二つに区切り、学習を進めていく。

一つ目は、帝国主義諸国間の植民地や勢力範囲をめぐる対立が原因となって起こった第一次世界大戦の様相と日本の立場、それらに対するアジア諸国の民族、独立運動の様相のまとめりである。日本では、民主主義運動が一時高まりを見せ、世界は、第一次世界大戦の反省の下、国際協調へと動いていった。

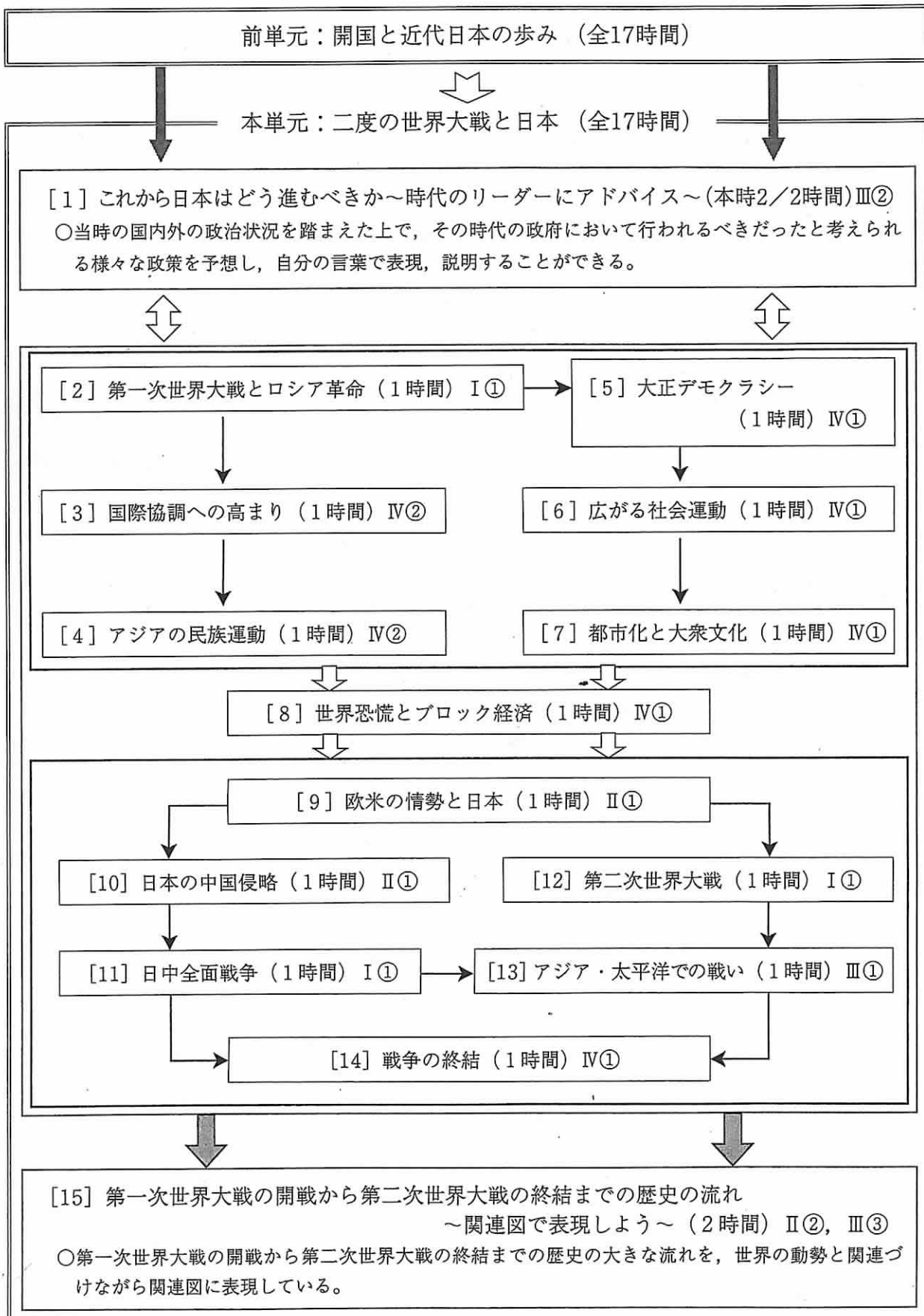
しかし、世界と日本の資本主義的経済システムが恐慌をきたし、それを契機に大国同士の危うい均衡の上に成り立っていたベルサイユ体制が崩壊し、経済混乱と社会不安が広がった。世界恐慌の混乱の中で、ファシズム勢力が台頭し、日本でも軍部が台頭して、恐慌の解決口を中国大陸侵略に求めた。やがて日本は国際連盟を脱退することとなり、国際社会からの孤立への一途をたどる中、ドイツ・イタリアと三国同盟を結んだ。そして、こうした動きの先には、ファシズム諸国による侵略戦争とそれを阻止する勢力との二度目の世界大戦があった。これが二つ目のまとめりである。

人類は近代という名のもとに、人間性、個の尊厳、人権、自由、平等、民主主義、平和などの考えや思想を共有し、20世紀までの長い間、それらを発達させてきた。このような思想とは逆に、それまでの人類が経験したこともない世界大戦を二度までも引き起こした。それまでの戦争は、いわば、局地戦であったが、この二度の世界大戦は、世界の人々を巻き込んだ総力戦であり、そのつど開発された新しい殺戮兵器の実験場でもあった。そのようなことから、20世紀は「戦争の世紀」であったと言っても過言ではない。重要なのは、次の世紀と世代に向けて、我々が20世紀の二度の世界大戦の反省から、平和の尊さを学んでいかななくてはならないことだと考える。

#### (3) 指導の重点

「表現する活動を通して、その時代を大観し、歴史の大きな流れの理解」という目標を達成するために、次のことに留意して指導していく。

#### 4 学習計画と評価計画



5 本時の学習指導

(1) 目標

当時の国内外の政治的状況を踏まえた上で、その時代の政府において、行われるべきだったと考えられる様々な政策を予想し、自分の言葉で表現、説明することができる。

(2) 展開

学 習・活 動	指導の手だて	評価の観点・方法
1 これまで学習した日本や世界の様子について振り返る。	○これまでの学習から国内外の課題を確認させる。	Ⅲ② (ワークシートⅡ)
2 前時で考えた各自のアドバイスを他の班員に説明する。	○「どうしてその政策なのか」や「なぜその場所にはったか」を説明させる。	
3 班で最も有効なアドバイスを選び、発表する。	○選んだ理由も付け加えて発表させる。	
4 発表を参考にして、各自の最終的なアドバイスを決める。	○アドバイスに正答はなく、当時の時代背景を踏まえて考えることを再確認する。	

(3) 課題設定におけるルーブリック評価

表 現 の 能 力		記 述 の 内 容
国内外の課題を確認し、「これからの日本の進むべき道」を考え、表現でき、説明できる。	4	作成されたアドバイスに記述された政策には、国内外の政治・社会状況を踏まえた対応策が指摘できており、自ら考えた政策の内容と理由を詳しく説明することができる。
	3	作成されたアドバイスに記述された政策には、国内外の政治・社会状況が指摘され、自ら考えた政策の内容を説明することができる。
	2	作成されたアドバイスに記述された政策には、国内外の政治・社会状況が指摘されてはいるが、政策が教科書の記述を中心にした説明に終始している。
	1	作成されたアドバイスに記述された政策には、国内外の政治・社会状況が指摘されておらず、政策も教科書の単語を記述したものになっている。

# 社会科（公民的分野）学習指導案

第3学年1組 33名

指導者 吉野川市立山川中学校 教諭  
遠藤 比呂誌

## 1 単元名 地方自治

## 2 単元設定の理由

### (1) 学習者の実態

本学級は、男子19名、女子14名、計33名で構成されており、学級の雰囲気は明るく、積極的に発表しようとする前向きな生徒が多い。その反面、社会科に対する興味・関心については、生徒によってかなりの温度差がある。苦手意識のある生徒の多くは、難しい語句への抵抗感や「どうやったら覚えられるのですか?」という質問からもわかるように、暗記教科というイメージをもっている。また、答の明確な記述的知識の発問に対しては積極的に発言するが、課題に対して判断する際の理由や説明的知識を問う場面になると、発言を避ける傾向が見られる。また、インターネットを活用した調べ学習には、多くの生徒が積極的に活動する姿が見られるものの、グループでの話し合いやまとめになると、社会科に興味のある生徒だけに任せたり、発言力のある生徒個人の考えが班のまとめになったりという、限られた生徒によって、授業が展開されることもある。

3年生になって今までの地理・歴史的分野の授業と比べて、より身近な公民的分野の学習でも、前単元の日本国憲法の授業ではまだ、身近なことと感じていない生徒が見受けられた。しかしながら一方で、政治家と芸能人による討論やわかりやすくニュースを解説する番組から、社会問題や政治・経済に対して興味をもつ生徒も増えてきている。「日本はどのようにして不況が続くの?」「政治とカネの問題とは?」などの質問を授業の合間に投げかける場面も見られ、長引く不況や国際化・情報化などの社会の変化の影響が、以前の中学生よりも社会科に対する興味・関心を高めていることを感じた。

吉野川市について生徒へアンケートしたところ、半数以上が今後も住みたいと考えるなど、地域への愛着は強い。一方で、吉野川市の今後については、80%以上の生徒が現状維持、もしくは衰退していくと予想しており、活気がなくなりつつあることを肌で感じている様子が窺える。

そこで、本単元では、吉野川市の将来を見すえた活性化計画を提案することで、身近な生活が政治と深くかかわっていることに気づかせたい。また、この学習が将来、なじみのない地域に定住する際にも、住民自治という地方自治の基本となる意識へとつながると考える。

### (2) 単元について

本単元は、現行学習指導要領の内容(3)のイ「民主政治と政治参加」に該当する。また本単元のねらいでは、「地方政治の基本的な考え方について理解させる。その際、地方公共団体の政治の仕組みについて理解させるとともに、住民の権利や義務に関連させて、地方自治の発展に寄与しようとする住民としての自治意識の基礎を育てる」となっている。

また公民の目標である(2)民主政治の意義、国民の生活の向上と経済活動とのかかわり及び現代の社会生活などについて、個人と社会とのかかわりを中心に理解を深めるとともに、社会の諸問題に着目させ、自ら考えようとする態度を育てるという点で強い関連性がある。

このような視点からも、吉野川市をとりあげることは、「地方自治」を身近なこととして、生徒にとらえさせる上で、適した単元であるといえる。本校が所在する吉野川市は、2004年10月に鴨島町・川島町・山川町・美郷村の3町1村が合併して形成された。徳島県内では平成の大合併の

さきがけの市であり、住民からは大きな期待をもって受け入れられた経緯がある。以降、徳島県では、次々と市町村合併が行われ、4市46町村から8市16町村へと統合されていった。『地方分権一括法』の制定による合併の促進と政府の三位一体改革による地方交付税の削減という背景があるものの、長引く不景気からどの地方公共団体も厳しい財政事情にあり、行財政の効率化は急務であると考えられる。このような合併のメリットと考えられることが吉野川市に果たしてあてはまるのか、合併から6年が経過した今、合併前と現在とではどのように吉野川市が変わったか、現状をまとめることで、最も身近な地方自治への関心を高めたい。その後、吉野川市で様々な分野で活動する人々と関わり、活性化の現状に触れていく。そこで聞き取った内容をふまえて「吉野川市活性化計画」としてまとめ、討論の流れの中で、さらに課題に対する認識を深めていきたい。

本単元の学習を通して、将来の地域社会を担う生徒に地方自治のしくみや意義について理解させたい。そして「吉野川市活性化計画」について深く考え、多面的・多角的に考察する活動から、生徒が主体的に地方自治に参加しようとする意欲を身に付けさせることで、住民参加による住民自治を基本とする地方自治の考え方の基礎を理解させたい。

### (3) 指導の重点

#### ①習得から活用

本単元では、地方公共団体の仕事やしくみ、「地方分権一括法」、首長と議会、住民との関係などの基礎的な知識から、なぜ地方分権が求められるようになったか。(習得①活用①)また条例の制定や直接請求権から住民が地方自治の主役であることを、知識としてとらえさせたい。

(習得①)市町村合併では、議員数の削減や予算のデータなどを基に徳島県や旧麻植郡と吉野川市の資料を比較し、合併前後の変化や合併以前と変わらない課題に気づかせる。(習得①活用①)このような学習の積み重ねをふまえ、吉野川市の活性化につながる計画を作成し、様々な分野から提案し、討論を行う。その中で、地理的分野で習得している徳島県農産物の阪神市場への出荷や、明石海峡大橋開通による観光客の増加などのキーワードが出てくる可能性が高いと考えられる。これらの既得知識を「活用」の場面である提案・討論の中で生かせる機会としたい。

#### ②習得させたい知識

吉野川市の合併前後の変化を資料から比較・検討させる。そして、地方自治の課題に気づかせたい。その後、地域で活動する人々から聞いた内容をもとに、「吉野川市活性化計画」を様々な分野から提案する。そして、その分野が活性化にどうつながるのか、理由を根拠にもとづいて検討させ、討論を行う。この一連の過程は、知識を習得するための方法としてとらえ、資料を使って比較・検討を行うことで記述的・説明的知識として習得させる。また、情報を適切に選択する思考力やわかりやすくまとめたり、論点を整理できる表現活動の指導にも重点を置きたい。個々における最終意思決定では、自分の考えを多角的に視点から再検討し、根拠をもとにした判断力と価値的知識を獲得する力を身につけさせたい。

## 3 単元の目標

### 【観点Ⅰ】社会的事象への関心・意欲・態度

- ①地方自治のしくみに対する興味・関心を高めることができる。
- ②地方公共団体の役割を意欲的に追究し、民主的な政治について考えることができる。

### 【観点Ⅱ】社会的な思考・判断

- ①地方公共団体の現状について吉野川市を例にあげ、市町村合併のメリット・デメリットについて、追究することができる。
- ②自分たちがつくった「吉野川市活性化計画」について、多面的・多角的に考察し、住民の立

場に立って判断することができる。

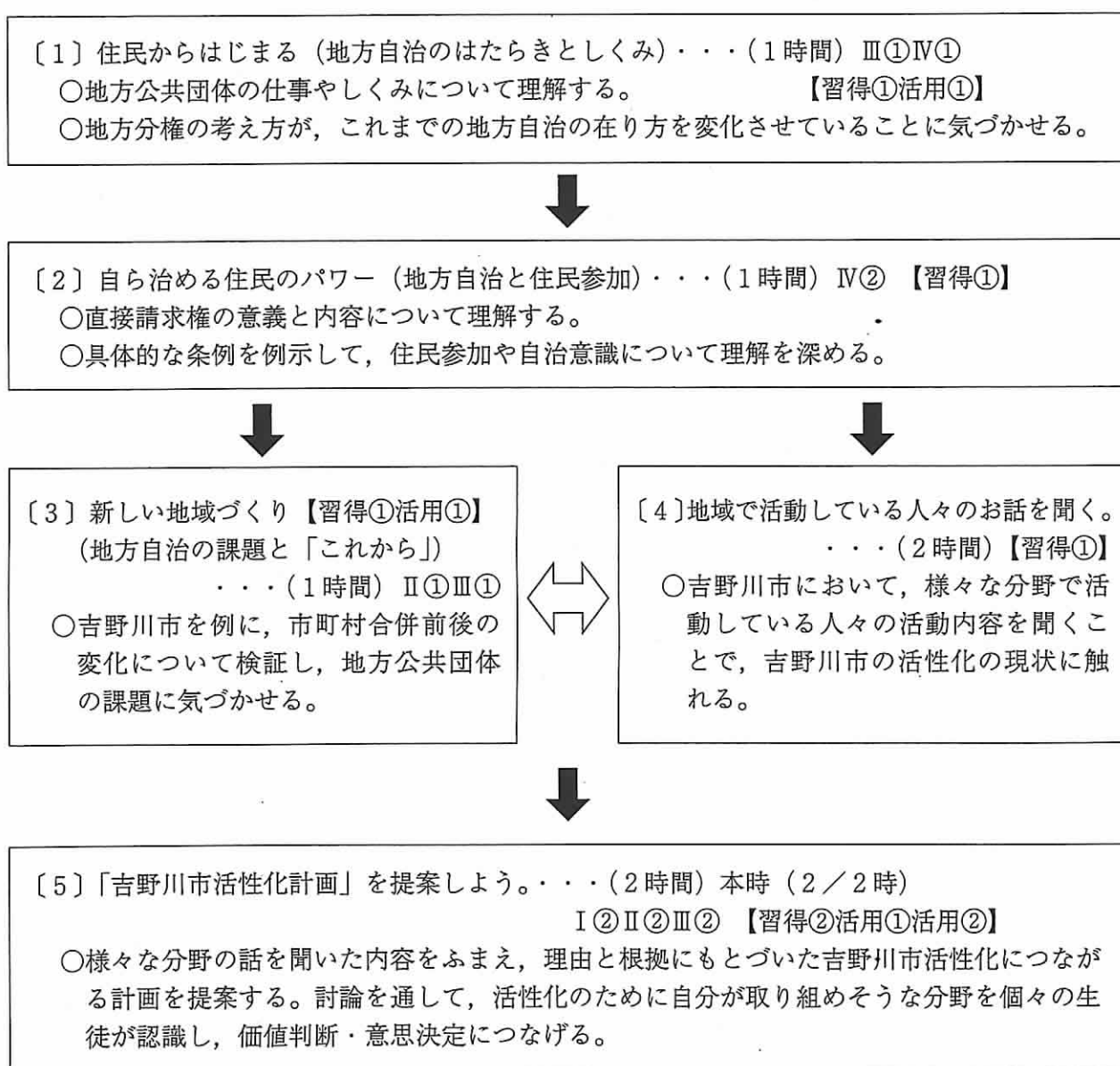
【観点Ⅲ】資料活用の技能・表現

- ①地方公共団体のしくみや活動について、徳島県や旧麻植郡と比較した資料を収集し、情報を適切に選択することができる。
- ②地域の取り組みなどについて、聞き取りやインタビューなどをもとに「吉野川市活性化計画」をまとめたり、説明したりすることができる。

【観点Ⅳ】社会的事象への知識・理解

- ①首長・議会・住民の関係について、理解することができる。
- ②直接請求のしくみと住民投票の事例を通して、住民参加に対する理解を深めることができる。

4 学習計画と評価計画（全8時間）





[6] 前時をもとに、吉野川市へ活性化計画を提案する・・・(1時間) I①【活用②】

○吉野川市へ提案する内容のまとめを行う。そして、今後どのように私たちは政治にかかわっていくか、自分の意見をまとめる。

## 5 本時の学習指導

### (1) 目標

「吉野川市活性化計画」を様々な分野から提案し、討論を深める中で、吉野川市の未来像を多面的・多角的に考察することができる。

### (2) 展開

学習活動	指導上の手だて	評価の観点・方法
1 前時の学習を振り返るとともに、「吉野川市活性化計画」を再確認する。	○前時で提案した内容をふりかえるとともに本時の課題の意識付けをする。	・ II② (ワークシート)
2 「吉野川市活性化計画」について討論をする	○討論に対して、根拠に基づいて応答できるように助言する。 ○意思決定につながる討論の過程を通して自分の考えを整理させる。	・
3 「吉野川市活性化計画」について、自分の考えをまとめ、最終の意思決定を行う。	○机間指導を行い、ワークシートへの記入を促す。 ○自分を取り組めそうな提案という視点を念頭に置き、意思決定につながる根拠を明確に表現できるように指示する。 ○自分の名前を書いたプレートを使い、最終意思を提示させる。 ○ワークシートの内容を発表させる。	・ II② (ワークシート)

### (3) 評価

「十分満足できる」と判断される状況	・「吉野川市活性化計画」について、提案・討論前の自己判断と比較し、理由と根拠を結びつけて、考察することができる。
「おおむね満足できる」と状況を実現するための具体的な指導	・「吉野川市活性化計画」について、提案した内容を振り返るとともに、討論の内容をワークシートを通して再確認し、検討させる。

### ①「時代究明の意識づけの学習」

本単元「二度の世界大戦と日本」において、時代究明の意識づけとして「これからの日本はどう進むべきか ～時代のリーダーにアドバイス～」を設定した。ここでは前単元において「習得」した当時の日本を取り巻く国内外の政治・社会状況に関する様々な知識を「活用」して、国内外の課題を克服し、これからの日本の進むべき道をその時代のリーダーにアドバイスする。生徒の思考力・判断力を高めるため、生徒が立てたアドバイスが史実と異なっても良いという立場で学習を進めていく。また、アドバイスは後に行われる史実を詳しく学習するときにおいて、常に比較・検証を行いながら授業を進めていく。

### ②「概念化シート」の使用

概念化シートを用いて多くの事象や考えをグループでまとめ、わかりやすく整理する。概念化シートを用いる利点としては、まとめるのが比較的簡単な上、その使用の過程でいろいろな考えが広がり、深まることができる。ここでは横軸を「外交」・「内政」、縦軸を「実現しやすい」・「実現困難」の軸に分けて生徒が考えた政策がどの領域になるかを班で考えさせる。この活動を通して生徒が必要に思う政策を自分の言葉で表現・説明する学習をより高め、より深めていく中で歴史を考察していく力を身につけさせたいと考えた。

### ③「歴史の大きな流れを大観する表現活動」

単元の終末に「第一次世界大戦の開戦から第二次世界大戦までの歴史の流れ ～関連図で表現しよう～」という授業を設定する。歴史の流れを大観する作業として関連図にまとめるのである。各々の社会事象は独立したものではなく様々な関連性を持っている。関連図にまとめるという作業は学習した内容の関連性や関係性を考えながら、歴史の流れを大観する表現活動としては有効であると考えられる。

## 3 単元の見どころ

### 【観点Ⅰ】関心・意欲・態度

①二度の世界大戦について関心を持ち、なぜこのような戦争を引き起こしてしまったのかについて、追求する態度を身につけている。

### 【観点Ⅱ】社会的な思考・判断

①各国の動きについて、公正に判断し、歴史の中の国家のあり方について考えている。

②第一次世界大戦開戦から第二次世界大戦終結までの歴史の大きな流れを、世界の動勢を背景にして考察し、把握することができる。

### 【観点Ⅲ】資料活用の技能・表現

①表・グラフなどを用いて、客観的な統計から、当時の情勢を読み取ったり、数量的な資料を示そうとしたりしている。

②前単元で学習した内容を踏まえ、政府の進むべき道を予測し、表現することができる。

③第一次世界大戦開戦から第二次世界大戦終結までの歴史の流れを大観できるよう「関連図」に表現することができる。

### 【観点Ⅳ】社会事象についての知識・理解

①二度の世界大戦とその間の日本の出来事について、世界の動きと関連させながら、概要を理解している。

②第一次世界大戦後の「民族運動の高まり」、「国際平和への努力」について理解することができる。